

マンチェスター会議 報告

—第3回デモクラシー R&D 国際会議—

別府大学文学部人間関係学科
教授 篠藤 明德

はじめに

デモクラシー R&D は、世界各国でミニ・パブリックスの普及に努めている団体、研究者等が集うネットワークである。2018年1月、スペイン・マドリードで開催された第1回会議で創設されたものである。それに先立つ2015年12月、日本では、日本ミニパブリックス研究フォーラムが創設されたが、設立総会には、ドイツよりハンス・ルトガー・ディーネル博士を招き、基調講演をお願いした。当初より、国際的ネットワークを築きながら活動して来たが、デモクラシー R&D の創設メンバーの一つになれたことは大変嬉しいことであった。

私は、日本ミニ・パブリックス研究フォーラムを坂野達郎教授（東京工業大学）と共に創設し、田村哲樹教授（名古屋大学）を含め、3人で共同代表を務めているが、最近では、次の時代を担う若い研究者が世界的ネットワークに繋がり活躍していることを大変喜んでい

今号では、前号に引き続き、2020年1月30日、31日の両日、イギリスのマンチェスターで開催されたデモクラシー R&D の第3回国際会議について報告したい。私は、昨年1月に開催されたパリ会議に継いでの参加である。場所は、産業革命の中心都市であったイギリスのマンチェスターであり、会場は近代民主主義においてとても重要な意味を持つ国立人民歴史博物館であった。

1 マンチェスター市

会議が開催されたマンチェスター市は、人口52万の都市であるが、周辺地域を含め、今日、270万人の特別市になり、イギリス第2位の大都市である。と同時に、何よりも、「産業革命の始まった都市」として歴史に名を刻んでいる。

周知のように、産業革命は18世紀中葉、機械制工業として紡績業が起こったことに端を発している。その誕生の様子をマンチェスター科学・産業博物館で見ることができる。こうした機械化により、世界的には綿花の栽培など原料生産地と製品の消費地として植民地ができ、国内では産業資本、金融資本と労働者を生み出した。つまり、「近代の政治経済システム」が登場したわけである。エンゲルスはここに22年住み、マルクスとともに同地で「共産党宣言」を構想し書いたと言われている。労働組合の歴史も長く、現在は、労働党の中心である。



マンチェスター科学・産業博物館

機械制紡績工場、銀行、王立交換所、輸出入港であったリバプールとの間を結ぶ鉄道、運河な

ど、歩いて回れるほどの同市の中心地では、こうした歴史的建物等を見ることができる。産業革命の後も、マンチェスターでは、自動車工業、飛行機生産、通信機器・システムの開発などが続いた。第2次世界大戦後は、ロック・ミュージック、サッカーの世界的中心になるなど、300年に満たないその歴史は、「近代システム」そのものを体現している。

会場であった人民歴史博物館は、国立博物館であるが、資金、運営は民間が担っているという。ちょうど昨年、「ペーターラーの虐殺事件」が起こって200年ということで、同博物館では特別展示が行われていた。この虐殺事件は、1819年8月、穀物法に反対し、議会改革を願った民衆がセント・ピーター広場に集まったところを軍隊が襲い民衆を虐殺したものである。その日、近郊から集まった民衆は、子供連れで全くの無防備であったという。

2 世界から参加者

デモクラシー R&D には、現在（1月20日）38団体、23個人が参加している。創立2年で急速な成長であるが、コーディネータのデーヴィット・シェクター氏は、団体・個人が100になった段階で一応制限しようと考えている。あまり大きくなると、機能しなくなるのでは、という心配からだ。

今回の参加者は72名であり、世界各国で精力的にミニ・パブリックスに取り組んでいる代表的研究者、実践者である。特記すべきは、市民陪審を考案し実施してきたネッド・クロスビー博士が参加されたことである。同博士は、プラヌクスツェレを考案されたペーター・ディーネル教授とともに1970年代にミニ・パブリックスの代表的方法である市民陪審を考案された。また、最近邦訳「選挙制を疑う」が出版され、日本でも注目されているベルギーのジャーナリスト、ダーヴィッド・ファン・レイブルク氏も参加された。討論型世論調査を考案されたジェームズ・フィッシュキン教授は参加できなかったが、同教授の率いるスタンフォード大学討議デモクラシー・センターも

ネットワークに加盟している。3年目にして、世界のミニ・パブリックスの研究者、実践者が一堂に会する会議・ネットワークに成長したことを実感した。

日本からの参加者は、三上直之さん（北海道大学）、竹内彩乃さん（東邦大学）、坂井亮太さん（朝日大学）と私の4人である。竹内さん、坂井さんは、第1回からの連続参加であり、全員、日本ミニ・パブリックス研究フォーラムのメンバーである。

今回の会議には、韓国葛藤学会、韓国葛藤解消センターの2団体から10人近くが参加した。これらの団体は、昨年、日本ミニ・パブリックス研究フォーラムが推薦し加盟した団体である。日本に継ぐアジアからの加盟である。



ネッド・クロスビーご夫妻と日本のメンバー

3 前日の夜

会議は、1月30日、31日の2日間であったが、前日は、OECDのミニ・パブリックスに関する会議が開催され、デモクラシー R&D から多くのメンバーが招待され、参加した。と同時に、前日には各国から多くの参加者がマンチェスターに到着するため、パリ会議同様に、前日の夜、気楽に参加できる夕食会が企画された。場所は、再開発され、劇場などがある HOME という建物である。午後6時半からドリンク・タイム、8時からディナーという設定であった。韓国から多くのメンバーが初めて参加するので、互いに親しくなる良い機会だと考え、私も強く開催を勧めていた。この会には30人を超えるメンバーが集まり、とて

も楽しい会になった。それぞれドリンク片手に相手を変えながら話し合う光景は、このネットワークの大きな魅力を示すものである。

韓国のメンバーは、時差ボケを押してディナーから参加した。私とは昨年8月の合同研究会（東工大にて）、10月のソウルでの学会、11月の地方自治学会と、集中的にお会いしてきたため、互いに大変親しく感じている。そこで、私の古い、ヨーロッパ、アメリカの友人を精力的に紹介することができた。



韓国のメンバーとともに

4 会議の目的

開催にあたって、ネットワークのコーディネータであるシェクター氏は、会議で期待される成果を下記のように整理している。

- ・パートナーシップ：メンバーが相互に知り合い、ともに活動できること。また、ネットワークとしてコミュニティ意識を育てること
- ・学習：参加者が熟議民主主義の現状を知り、他のメンバーの活動を知ること。また、他の実践から現実的工夫を学ぶこと。
- ・ネットワークにおけるグループ目標：参加者は、協働について討論し、それを実施する仲間を見つけること。会議後、着手できるように2人のコーディネータを作ること。
- ・ネットワーク全体の取り組み：ネットワーク全体について重要な合意をつくること。参加者は、ネットワーク全体に対して何らかの貢献をすること。
- ・開催地に対するインパクト：開催地であるマン

チェスター特別市に、このネットワーク会議が何らかのインパクトを与えること。

以上のような成果目標を持ち、2日間のプログラムがメール等のやり取りを経ながら、準備された。

5 会議初日（1月30日）

9時15分に会議はスタートしたが、まず、主催者を代表してエド・コックス氏が歓迎の挨拶をおこなった。会場である人民歴史博物館は国立の施設であり、イギリスの民主主義にとって重要な施設の一つであると説明した。

続いて、ネットワークのコーディネーターを務めるデイヴィット・シェクター氏は、ネットワークの成長と東ベルギー、続いて、ブリュッセルでミニ・パブリックスの制度化が進んでいると報告した。また、この会議には、スコットランド政府の関係者も参加し、会議終了後、同地で実施が予定されている気候変動に関するミニ・パブリックスについて助言を求めていると述べた。また、ネットワークに貢献する人々、団体を紹介したが、市民陪審を50年前に考案し、この運動の先駆けとなったネッド・クロスビー博士夫妻を紹介すると、参加者からひととき大きな歓声が上がった。

9時35分から、小グループに分かれて自己紹介を行った。私の参加したグループでも、ベルギーで運動している方、ケンブリッジ大学の博士課程（物理学）で研究する傍ら、クジの民主主義の運動に取り組む若者、OECDの職員、ドイツ・フライブルクの市民活動家など多彩な仲間がそろった。そこでは、各国での動向が互いに報告されたが、それぞれのバックグラウンドやミニ・パブリックスに対する個人的な思いに直接触れることができた。また、EU各国・各地での取り組みは日本ではなかなか知る機会がないので、大変参考になった。

10時5分から、ブレア政権で顧問等を歴任したマシュー・テイラー（Mathew Taylor）氏、マンチェスター特別市のアンディ・バーンハム（Andy Burnham）市長、オーストラリアの

ン・カールソン (Lin Carson) 教授による鼎談が行われた。まず冒頭、バーンハム市長がマンチェスター市の特別な歴史などを語り、政治家として現在の民主主義の状況をどのように考えているのかを説明した。その後、テイラー氏は、民主主義の改革では権威、価値創造、個人においてバランスを取ることが大切であると発言した。次に、リン・カールソン教授は、一般市民が無作為で選ばれ、情報を提供され話し合いを繰り返しながら、コンセンサスに基づいて公共的課題を解決しようとするミニ・パブリックスの重要性について語った。政治代表者は、こうした声を聞くことが大切であると言い、その後三者の間で活発な議論が続いた。

11時5分から30分の休憩を挟み、OECDにおいて世界各国で実施されているミニ・パブリックスの調査をしているクラウディア・クワリッシュ (Claudia Chwalisz) 氏から報告があった。世界的にその潮流は大きくなっているという。昨年、世界で約280のプロジェクトが実施され、参加市民の総数は54,908人であった。平均参加日数は、3.7日であるという。自治体レベルから国家レベル、超国家レベルなどで実施され、その目的は4タイプに分類される。報告後、小グループに分かれ、こうしたミニ・パブリックスの動向をどのように考えるか、討論した。

12時10分からは、デモクラシー R&D の規約について議論した。小グループの議論では、「無作為抽出」について、sortition、random selection、lottery など用語が不統一であるため、社会に普及する障害になっているという指摘があった。

1時間の昼食時間を挟み、14時15分から午後のプログラムがスタートした。最初のセッションでは、参加者が検討すべきアジェンダを提案し、小グループに分かれ議論した。私は、「世界市民会議」と「参加者募集」の2つの小グループに参加した。前者では、各国で増加する移民に焦点を当て、国境を超えた議論ができるのではないかと、という提案があった。後者の議論では、無作為に抽出した市民により多く参加してもらうために様々な工夫が行われているが、その工夫を互いに学ぶことができるように、ネットワークの Web に

コーナーを設けてはどうかという提案が出された。

15時25分からネットワークの Web を担当しているアダム・クロンクナイト (Adam Cronknight) 氏から説明があった。初日の会議は、17時まで続いたが、19時30分の夕食会までの時間、希望者を対象に人民歴史博物館見学がおこなわれた。その中で、ペータールーの虐殺事件を一人芝居で紹介してくれたが、当時の様子をリアルに感ずるとともに、民主主義の成立の陰に流された民衆の血、その悲劇を現代において大切にしたいという、同博物館の強い意志を感じた。

夕食会は、パブで参加者が小さなグループで行き来しながら交流することができた。韓国からの仲間、同行した夫人達も合流し、楽しい交流の場を持つことができた。



マンチェスター会議の様子

6 会議2日目 (1月31日)

2日目は、9時5分からスタートしたが、最初のセッションは、各国・各地域等で実践されている10の事例について、関係者が小グループを回りながら紹介し、質疑応答を受けるという内容であった。

フランスのミッション・プブリークでは、昨年からは EU、各国政府やグーグル、フェイスブックなどの企業と連携し、グローバル問題についてミニ・パブリックスをどのように設定できるかという枠組みづくりについて話し合いを進めている。気候変動、人工知能など国境を超えた課題が噴出しているからである。

ベルギーでは、ドイツ語共同体（東ベルギー）で、ミニ・パブリックスが制度化されたが、首都ブリュッセルでも制度化が進んでいる。法案では、市民協議会の構成が政治家15人、一般市民45人となっており、この構成について報告者は否定的であった。

マドリードでも昨年、制度化されたが、その後6月の選挙で政権交代があり、現市長は否定的であるという。スペインでの今後の展開については、バルセロナ市に期待したいという。

スコットランド政府は、気候変動に関する市民会議（Citizen Assembly）を計画している。この会議の決定は法的拘束力を持つものではない。政府担当者が出席した。彼女は、6、7年前から政府職員として働いているが、元々は歴史学者であるという。とても情熱的な女性であった。

ドイツでは、昨年、連邦レベルで市民会議が開催され、大きな反響があった。テーマは「民主主義の刷新」である。ブラジルでは、気候変動について、自治体レベルでどう考えるかということで、ミニ・パブリックスが開催された。具体的には、廃棄物のリサイクルのための分別である。ブラジルでは分別が進まない一方、廃棄物を輸入して処理しているという。市民提言として「リサイクル市を目指す」とし、市民と行政が協力することで、半分のコストでできる、と評価した。

11時40分から昨日に引き続き、2回目のオープン・スペースということで、参加者から提案されたアジェンダについて、小グループに分かれ議論した。私は昨日に続き、ホームページを担当するクロクナイト氏のグループに参加した。彼は、言葉の統一とともに、一般市民にもわかるような表現や紹介ビデオの活用についても言及した。

1時間の昼食時間の後14時から、昨日に続き、ネットワークの規約案の後半について小グループに別れ、議論を続けた。その後、来年の第4回会議が行われるベルリンから報告と相談があった。ベルリン工科大学のハンス・ルトガー・ディーネル教授、ベルテルスマン財団のドミニク・ヒーレマン（Dominik Hierlemann）博士がホスト団体の代表者である。最後に、今回の会議についての評価を参加者が輪になって、一人ひとり口頭で発

表した。

会議終了後、希望者はマンチェスター市街地のツアーを1時間ほど行ったが、私は、「選挙制を疑う」の著者・レイブルック氏と歩きながら話すことができた。最近、日本に来て、第2次世界大戦後、南方の取り残された日本兵士にインタビューしているとのことであった。



おわりに

マンチェスター会議は、私にとって、パリ会議に続いての参加であったが、デモクラシー R&Dでは、月1度くらいのペースでビデオ会議が開かれている。そこでも多くのメンバーと顔を合わせているため、1年ぶりの会議という気がしなかった。こうしたインターネット会議とともに、年1回のフェース・ツアー・フェイスの国際会議はますます意義があると思う。世界各国に広がるメンバーであるが、「仲間意識」があるのはとても不思議であり、また、大変貴重である。討議デモクラシー、ミニ・パブリックスに関する研究者も多いが、実践を通して民主主義を良くしたいという思いが土台にあるからだろうと思う。